

青森県国民教育研究所教育図書・資料室

古里 貴士

はじめに

地域を事例とした研究を行う場合、研究に必要な資料がどこにどの程度残されているかを確定していくことが、まずもって必要な作業となる。本稿では、資料の所在と傾向を共有する事で地域を対象とした研究に資することを目的として、筆者が2009年に訪れた青森県国民教育研究所教育図書・資料室（以下、教育図書・資料室）について紹介したい。

1. 地域に根ざした教育研究の歩み

青森県国民教育研究所（以下、研究所）は、1965年に設立されて以来、45年の歴史を有している。その教育研究の歩みの特徴を一言で表すとすれば、青森という地域に根ざした教育研究の歴史ということになるであろう。それは、研究所が自らの歩みについてまとめた『青森民研15年のあゆみ』（1980年）や『25年のあゆみと課題』（1990年）の副題が、ともに「地域に根ざした」という表現を含んでいることから看取できる。以下では、いま挙げた両書を参考にしながら、研究所の研究の歩みについて概観したい。

研究所は、1965年に青森県教職員組合によって組合立の研究所として設立された。初代所長には専任の研究者として小出達夫が就任した。設立当初の研究所は、①教科の研究、②教育行財政にかかわる研究、③青少年、児童がもつ問題の研究、④教育運動、とくに民間教育運動史の研究という四つの研究領域を設定し、研究に取り組んだ。また、その研究領域に応じた研究委員会が組織され、①教科研究委員会、②教育行財政研究委員会、③問題状況研究委員会、④教育運動史研究委員会の四つの研究委員会が作られ、必要に応じて研究小委員会が組織された。こうした研究所で取り組んだ研究の成果は、研究所の所報である『国民教育研究』（以下、所報）にまとめられ公開されていた。特に、1960年代の研究所では、「現場に直接役立つ教育実践資料の提供」¹⁾が主要な任務とされており、その成果として「日本の歴史（1）～（5）」（4,5,9,15,19号）や「物質概念の基礎」（6号）などが所報にまとめられている。

1970年の県教組と高教組の分離によって連合立研究所となった研究所は、同年に小出達夫が北海道大学に転出したため非専従の所長として鈴木清龍が就任し、新たな形での運営が行なわれるようになった。というのも、それまで現場に役立つ教育実践資料を提供することに重点を置いていた研究所の取り組みは、鈴木の前所長就任をきっかけとして、問題領域の研究に力を入れるようになったのである。特に1970年代の青森県では、むつ小川原開発を中心とする地域開発政策が進行していた。そうした背景もあって、地域研究を中心にした問題領域の研究に重点を置いて取り組まれる

ようになったのであった。それまでも所報の2号で「地域と教育」の特集が生まれ、八戸市や青森市が取り上げられたことはあった。しかし、70年代に入ると「新全総」と青森県(41号)、「地域開発」と公害(44号)、「巨大開発問題へのひとつのアプローチ」(45号)、「開発と住民の学習」(52号)など頻繁に地域の開発問題が取り上げられるようになり、研究所が地域研究に力を入れていったことがわかる。また、所報の号外として「むつ小川原開発」(1972年4月)や資料として「作文集むつ小川原開発と六ヶ所村の子どもたち」(1972年8月)、「開発と住民運動における教師」(1972年8月)なども発行され、特にむつ小川原開発に力を入れてとりくんだ様子が伺える。

1980年代に入り、青少年の非行などの青少年が発達上抱える課題や臨時教育審議会に代表されるような行政改革の名のものと国家統制などが明らかになってくる中で、研究所の研究領域は概ね(1)政策研究、(2)地域研究、(3)子ども研究、(4)教科研究の四領域に定式化された。特に子ども研究には重点が置かれており、「青森の子どもの「からだと心」調査」(66号)、「今、子どもにとって必要なもの」(74号)、「子どもをとらえる－子ども調査と子ども把握－」(77号)などがまとめられており、所報とは別に子ども調査のための手引きも二冊作成されている。

以上のように、研究所の歩みの中で、重点が置かれた研究テーマは、教育実践資料の提供、地域研究、子ども研究と変遷してきた。しかし、研究所は青森という足元の地域に目をむけながら研究をすすめるという姿勢は一貫しており、その成果は『国民教育研究』(現在では『教育情報青森』)といった研究所発行の所報を通じて人々に届けられてきているのである。

2. 地域に生きる教師たちの歴史の集積

1988年、それまでに蓄積してきた書籍や資料を広く教職員や県民の閲覧に供するという趣旨の下、青森県教育公務員弘済会創立三〇周年記念助成を得て、研究所に教育図書・資料室が設置された。この時作成された「青森県国民教育研究所教育図書資料室利用のしおり」によれば、20年余りの研究活動を通じて収集された図書や資料は、教育関係図書が約2万8千冊、教科書類が約3千冊に及んでいる。研究所が地域に根ざした教育研究を志向してきたため、教育図書・資料室では、青森でなければほとんどみることができない地域固有の図書や雑誌などの資料が数多く見られる。特に、公立図書館には残されにくいような、住民運動に関する資料や個々の教師たちの教育実践を物語る資料が意識的に残されていることは注目できる。以下では、研究所が作成した『教育図書・資料室蔵書目録』第1巻(1990年)(以下、目録)²⁾と筆者が2009年9月に教育図書・資料室を訪れた際に見聞したことを基に、教育図書・資料室の所蔵資料の具体的内容についてまとめたい。

(1) 青森県内の刊行物、特に青森県内の教員サークルや運動組織等の刊行物

まず、目録を見ても、あるいは教育図書・資料室を実際に利用してもすぐに目に留まるのは、青森県内の刊行物が多く収集されていることである。

古いものでは、青森県教育会発行の『青森県教育』が109号(1922年10月)から、途中の欠番

は多いものの328号(1941年12月)まで集められている。戦後も青森県教育委員会発行の『青森県の教育』が昭和28年版以降から収集されており(ただし、目録では昭和62年版、63年版は欠番になっている)、戦後の青森県全体の教育の動向がつかめるようになっている。

特に、青森県内の教育研究サークルや運動団体等の刊行物が多く収集されていることが、教育図書・資料室の一つの特徴である。例えば、青森県教職員組合発行の青森県内の教育研究集会の報告集である『青森の教育』は1953年発行の第二回から収集されており、これを基に教研集会に取り組んできた教師たちの姿を知ることができる。また、1964～67年と短期間ではあるものの青森県教組教文部が編集・発行した『こぶし』全16号や、80年代に高教組下北支部が発行した反核燃の記録である『狂気の沙汰』や『原燃鬼』も収集されており、教研集会以外での教組の動きの一端を知ることができる。教組の刊行物の他にも、県内の教育研究サークルの刊行物が収集されており、青森県作文の会編の『青森の子ら』や同会発行の児童生徒詩文集である『ふぶき』が1970年の第一号から収集されている。この他にも研究所と青森県地理教育研究会及び青森県歴史教育者協議会による共同の刊行物である『青森の地域研究』や、研究所と青森県歴史教育者協議会の刊行物である『埋火』1～3号などがある。これらを通じて、青森の教師たちが自主的かつ集団的に取り組んできた教育研究や地域実践の歩みを知ることができる。

(2) 青森県内の学級通信及び文集

教育図書・資料室に収集されている刊行物の中でも特に目を引くのは、数多く収集されている青森県内で発行された文集や学級通信などである。約260ページほどのページ数である目録のうち約20ページが青森県内で発行された学級通信集や文集などに割かれていることがその多さを物語っており、実際に教育図書・資料室の一角には学級通信集や文集がところせましと並べられている。その中には、組合発行の詩集なども含まれてはいるものの(八戸市教職員組合『八戸市子ども詩集〈花園〉』、三戸郡教職員組合『三戸子ども詩集〈土手〉』など)、多くは教師の固有名詞が付された学級文集や学級通信、学校名が付された学校文集であり、青森県内各地から、小学校から高校まで数多くの文集や通信が収集されている。こうした文集や通信は、歴史に残ることが難しい教育実践の様子や子どもたちの様子を物語るものであり、貴重な資料であるといえよう。

(3) 新聞記事のスクラップ

地元新聞の記事は、地域の中で起きた細かな動きを知る上で貴重な資料となる。研究所では、県内で発行されている新聞の記事を切り取ってスクラップしており、青森県内での出来事を知る上で貴重な資料を提供している。新聞記事は項目ごとにファイリングされており、利用者の関心のあるテーマに応じて利用できるようになっており、またそのテーマは、教育関係の記事に限らず「むつ小川原」などの地域開発に関するスクラップも作成されている。教育図書・資料室には、この地道な取り組みの集積である数多くのファイルが所狭しと並べられている。

(4) 教科書

既述のとおり、教育図書・資料室には設置時点でも約 300 冊の教科書が集められている。目録には戦後の教科書のみが掲載されているものの、実際には明治期から現在に至るまでの各教科の教科書を教育図書・資料室は所蔵している。そのため、教育図書・資料室を利用する人びとの中には、戦前の古い教科書を利用する目的で教育図書・資料室を訪れる人も多いとのことである。

(5) 青森県国民教育研究所の刊行物

そして、研究所の刊行物も当然ながら所蔵されている。すでに紹介した所報、所報の号外や資料などの他にも、下北地域の住民運動や教育運動、教育実践に関する研究成果をまとめた『やませ』(1977年)や『続やませ』(1987年)、青森県で取り組まれた教育研究運動の戦後史についてまとめた『北に生きる教師群像 青森県戦後民間教育研究運動史』(1989年)などが所蔵されており、研究所が地域に根ざして行ってきた研究成果を知ることができる。

以上みてきたように、教育図書・資料室では、青森県という地域に根ざした図書や資料が重点的に収集・所蔵されており、利用者に提供されている。ここで紹介した図書や資料の他にも、書店で購入できるような教育関係の図書や雑誌も、当然ながら所蔵されている。しかしながら、上でも記したように公立図書館には残されにくいような教育研究サークルの刊行物や文集・学級通信などを数多く残していることが教育図書・資料室の特徴であり、これは公立図書館にはない特色であると思われる。また、筆者が教育図書・資料室を利用した際に、第二代研究所所長であった故鈴木清龍氏が残された資料を研究所に所蔵するというお話を伺っている。このように、地域に生きた人々の残した資料が集まるのは、研究所が地域に根ざした教育研究を志向し、教育図書・資料室が地域の資料を重点的に残してきたからこそのことといえよう。

3. 連絡先

以下、研究所の連絡先を記しておきたい。なお、筆者は、研究所の所長である斎藤作治氏を通じて教育図書・資料室を利用させていただいたため、研究所の発行物が所蔵してある書棚について利用させていただくことができた。しかし、研究所の発行物を所蔵した書棚については、原則として利用できない旨の掲示が行われていたため、もし研究所の発行物を所蔵した書棚を閲覧したい場合は、事前に研究所へ連絡を取り、閲覧の承諾を得てから、教育図書・資料室を利用することをお勧めする。

青森県国民教育研究所

住所：〒030-0823 青森市橋本一丁目2番25号（教育会館内一階）

TEL：017-723-4045

E-mail：aomoriminken@zenkyo.org

開館時間：午前10時～午後5時（土日は閉館）

- 1) 千田忠「青森県国民教育研究所二五周年にあたって」青森県国民教育研究所編『25年のあゆみと課題－地域に根ざした国民教育研究運動の創造をめざして－』、青森県国民教育研究所、1990年、14ページ。
- 2) なお、1990年に第一巻の目録が刊行されて以降は、新たな目録は作られていない。

〈参考文献〉

- ・青森県国民教育研究所編『青森民研15年のあゆみ 地域に根ざした教育の創造をめざして』、青森県国民教育研究所、1980年
- ・青森県国民教育研究所所員会議「八十年代の課題に応える新たな前進を」青森県国民教育研究所編『国民教育研究』No.86、青森県国民教育研究所、1986年
- ・青森県国民教育研究所編『25年のあゆみと課題－地域に根ざした国民教育研究運動の創造をめざして－』、青森県国民教育研究所、1990年
- ・青森県国民教育研究所編『教育図書・資料室 蔵書目録』第1巻、青森県国民教育研究所、1990年
- ・青森県国民教育研究所編『教育情報青森』No.100、青森県国民教育研究所、1998年